

出雲国風土記にみる 仁多郡の素晴らしさ

出雲国風土記をテーマにしたシンポジウムが十一月二十三日にカルチャープラザ仁多で開催され、県内外から愛好者約二百人が集いました。

「出雲国風土記の想像力」奥出雲の世界」と題された基調講演では、お茶の水女子大学の荻原千鶴教授が出雲とその他の風土記の文面を詳細に比較した上で、出雲の特異性について解説されました。また、鬼の舌震に関する記述（サメが姫を恋い慕う）について「拒絶されても付きまとわず、遠くから相手を思い慕うだけの姿は古くて新しい。この男性像を奥出雲から発信してみても」とユーモアたっぷりに提案し、参加者を楽しませました。

その後のパネルディスカッションもパネリストが各々の自説を語りながら、古代奥出雲に思いを馳せました。



▲炉から現われる鑊に歓声

みんなのでつくった鑊

木原村下も太鼓判 たたら体験学習

地域の宝である「たたら製鉄」を通じて、郷土を愛する心を育むことを目的に「たたら体験学習」が実施され、町内の十一小学校から六年生を中心に児童百六十一人が参加しました。

本格的なたたら吹き製鉄に倣い、炉づくりから始まる全操業が子どもたちの手で行われ、十一月二十一日夕方、ついに鑊出しとなりました。

炉を壊し始めてから一時間後、ようやく姿を現した鑊に子どもたちは大きな歓声をあげました。出来上がった鑊は三〇kgを超える見事なもので、子どもたちは「炉に風を送り続ける作業を休むことができず、とても大変だった。でもいい鑊ができたので家族に伝えた」と満足げでした。

たたら製鉄が創り上げた 後世へ遺すべき景観

文部科学省の諮問機関である文化審議会は十一月十五日、「奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観」を重要文化的景観に選定するよう、下村文部科学大臣に答申しました。

今後、答申のとおり選定される予定で、選定されれば中国地方では初となります。八世紀に編纂された出雲国風土記に既に製鉄について記されていた奥出雲町の、鉄穴流しなどによって形成され先人たちが守り伝えてきた素晴らしい景観が「日本国として遺すべきもの」と認められたことで、今後、国内外からの注目が更に高まること期待されます。

答申までの経緯	
平成22年度	町政座談会にて有力鉄師の調査研究や関連遺跡の整備、鉄穴残丘が残る地域の保存活用を検討するよう意見をいただく たたら製鉄の価値を検証するためのプレ調査を実施
(H22.10.1)	奥出雲町が景観行政団体へ移行
平成23年度	奥出雲町景観計画を策定 奥出雲町文化的景観調査検討委員会を設置 上記委員会による学術調査を開始
平成24年度 (H24.4.1)	奥出雲町景観条例を施行 学術調査結果を「奥出雲町文化的景観調査報告書」をまとめる 選定申出地域の保存管理に関わる「奥出雲町文化的景観保存計画書」を策定 選定申出地域の住民に対して説明、合意形成
平成25年度 (7月)	文部科学大臣に申出書を提出

重要文化的景観へ申し出た区域

奥出雲たたらと棚田の文化的景観



答申を記念し シンポジウム開催

重要文化的景観選定への答申を記念し、「たたら製鉄と棚田の文化的景観」と題したシンポジウムが十二月八日、横田コミュニケーションセンターで開催されました。

文化庁記念物課の市原富士夫文化財調査官による基調講演では、国内外の事例を紹介しながら「景観をただ保存するだけでなく、どのように活用し創造につなげていくかが重要。それには住民による小さな工夫の積み重ねが必要」と選定後の取り組みについてアドバイスがありました。

また、奥出雲町文化的景観調査検討委員会の四人の委員から、地形学、農業工学など専門の立場での調査成果が報告されました。会場を埋めた約二百人の聴講者にとつて、たたら製鉄が育んだ景観の価値を改めて理解することができた機会となりました。



木原村下 伊勢神宮式年遷宮へ 特別奉拝者として参列

去る十月五日、伊勢神宮で行われた第六十二回神宮式年遷宮に、国選定保存技術保持者で日刀保たたら村下の木原明さんが特別奉拝者として参列されました。



日刀保たたらは、今回の遷宮時に奉納される御装束神宝の太刀用玉鋼の奉納や、操業火入れ式に伊勢神宮より臨席いただくなど関わりが深く、皇室代表の秋篠宮殿下をはじめ御槍などの御装束神宝を持つ神職百人以上が執り行う厳粛な儀式「遷御の儀」を真近で奉拝することが許されました。木原村下は「神聖な御装束に玉鋼を使っていただけのことには名譽であり誇り。関係者一同、一層精進したい」と思いを新たにされました。

二十年後の次回遷宮の際に使用される日刀保たたら玉鋼も、既に奉納されているとのこと。